



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

## <研究動向> 「ケルト」とは何か

著者	九鬼 由紀
雑誌名	関学西洋史論集
号	43
ページ	71-94
発行年	2020-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00028526">http://hdl.handle.net/10236/00028526</a>

〔研究動向〕

## 「ケルト」とは何か

九 鬼 由 紀

はじめに

日本の「ケルト」研究の大家、鶴岡真弓氏が2017年に上梓された『ケルト再生の思想－ハロウィンからの生命循環』（ちくま新書、2017年）は、近年の日本でもすっかり定着した行事、「ハロウィン」を、アイルランドに残る「ケルト」文化からひもといた作品である。ハロウィンの原型とされる「サウイン」からはじまり、芽吹き季節の訪れを告げる「インボルク」、サウインの対極に位置する夏の祝祭「バルティネ」、そして収穫季節の祭日「ルーナサ」の4つの祭りと、それらが表象する「生命循環」が描き込まれた中世の装飾写本、『ケルズの書』を紹介している。この作品は、「生命のサーキュレーション」（10頁）の出発点としてのサウイン、そして、その祭礼の担い手であったとされる「ケルト人」への礼賛にあふれている。

鶴岡氏は、アイルランドが「ケルト」の生き残りだと信じてやまない。しかし、氏の「ケルト観」や彼女の作品たちには、本来なら押さえておくべき重要なファクターが欠けている。すなわち、古代アイルランド島の文化を、「ケルト」と呼びあらわすことができないという、現在の欧米では当然の見解である。

古い概説として、「ケルト」は以下のように説明されてきた。

紀元前8世紀半ば、ヨーロッパ地域は鉄器時代に入る。その担い手であったケルト人は、紀元前4世紀から紀元前3世紀にかけてその勢力を西はイベリア

半島から東は小アジアに渡る広い地域に拡大した。紀元前2世紀に入り、これらの地域の多くはローマによって征服され順次ローマ化し、ケルト人の文化はアイルランド、スコットランド、ウェールズの、いわゆる「島のケルト」とされる地域に残るのみとなった。一般的な「ケルト人」の定義はこのようなものであり、「ケルト」がブリテン島やアイルランド島の片隅へ逃げ延び、ひっそりと生き残っていたと考えられてきた。

しかし、1970年代以降、このような「ローマ侵略以前に大陸のケルト人がブリテン島とアイルランドに移住し、中世に入っても自分たちの文化を保持し続けた」という説を否定する「“島のケルト”否定論」が、とくにイギリス考古学界において盛んになり、上記の概説は今や認められないものになっている。エディンバラ大学のジョン・コリス (John Collis) などの否定論者は、「島のケルト」について、18世紀以降のロマン主義やナショナリズムの高揚の中で捏造されたものであり、本当はブリテン島やアイルランドには「ケルト人」はいなかったと言う<sup>1)</sup>。さらに、その議論は「ケルト」概念そのものにまでおよんだ。すなわち、「ケルト」という民族的な同一性を持った集団はそもそも存在しなかったのだ、と<sup>2)</sup>。

このように、今や「ケルト」研究の土台であるべき「ケルト」の概念はもろく、いつ流されて消えゆくかもしれないほどである。この不安定な状況を無視することは、研究者としては到底許されることではない。

しかし、この「ケルト」概念の不安定さは、何を原因に生じ、なぜ現在までつづいているのか。そしてその危うい土台のうえで、「ケルト」を研究するということは、どのような意味を持ち得るのか。本稿では、ケルト概念やこれまでのケルト史研究の展開を概観し、「ケルト」研究の意義をあらためて確認していきたい。

## 1章 3つの「ケルト」—歴史、言語、そして考古—

本題へと入る前に、「ケルト」の定義について確認しておこう。

『オックスフォード古典学辞典 *Oxford Classical Dictionary*』において、「ケルト」は「ガリツィアからガラティアの、地中海地域北部におもに居住した人々の集団に、古代の作家があたえた名前（ウェールズ人、スコットランド人そしてアイルランド人への適用は近代のもの<sup>3)</sup>」と説明される。また、『ケルト文化事典』においては、「ケルト」は「出自は異なるものの、ケルト語といわれる言語を話す諸民族の総体<sup>4)</sup>」であるとされる。この「ケルト」というシンプルな単語に込められている複雑さについて知っておく必要がある。

「ケルト」と呼ばれる集団には3種類あって、そのそれぞれでしめすものが異なってくるのである。

### 1-1) 歴史

ケルト人は文字を持たなかったため<sup>5)</sup>、自分たちの社会生活について、みずからの手で書き遺すことはなかった。古代のケルト人については、同時代もしくは数世紀後のギリシアそしてローマの古典の描写からしか知れない。それらのなかで彼らはギリシア語で「ケルトイ」「ガラタイ」、ラテン語で「ケルタエ」「ガッリー」と呼ばれ、またその人々の居住域が「ケルト」や「ガリア」と称された。

しかし、その言葉が設定される範囲（原住地域）は作家によって異なり、また「ケルト」と「ガリア」という呼称も区別してもちいられてはいない。ここでは、その著作において「ガリア」、すなわち「ケルト」の範囲を記載している、カエサル、ストラボン、そしてプリニウスの認識を確認しよう（図1）。

まずカエサルは、ガリアを広義ではピレネー山脈からライン川まで、狭義ではセーヌ川、マルヌ川、ガロンヌ川に囲まれた地域とする<sup>6)</sup>。同様に、ストラボンは、ピレネー山脈からライン川までを<sup>7)</sup>、プリニウスはピレネー山脈からスヘルデ川までがガリアであると記している<sup>8)</sup>。西端がピレネー山脈であるということは3者ともに同じであるが、東端については異なっている。「ガリア」、すなわち「ケルト」はもっとも東端でもライン川までしかおよばず、それより東は「ゲルマニア」であるとみなされているのである。

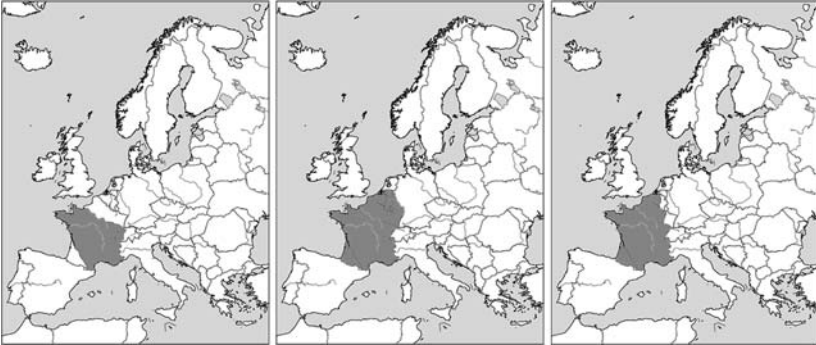


図1 (左より) カエサル(狭義)、ストラボン、プリニウスの「ケルト(ガリア)」(黒塗り箇所) [筆者作成。]

これらの地域をはじめとする「<sup>ト</sup>ラ<sup>ン</sup>ス<sup>アル</sup>プ<sup>ス</sup>の向<sup>コ</sup>う<sup>側</sup>」に暮らしていたとされる人々は、ケルト人は、しばしば「好戦的な野蛮人」として描写された。ポリュビオスによれば、紀元前400年ころ、パドゥス川(ポー川)流域の豊かな平野へとケルト人の大軍勢が押し寄せ、先住のエトルリア人を追い出してその地に住み着いたと伝える<sup>9)</sup>。またリウィウスは、ケルト人のアルプス越えは、当時のケルト人の王アンビガトゥスの命により、ベロウエスとセゴウエスというふたりの若者が率いたと伝えている<sup>10)</sup>。彼らはまずメディオラヌム(現在のミラノ)を築いた。イタリア侵入の10年ほど後(ポリュビオスによれば紀元前390年もしくは387年)、セノネース族がローマ市まで攻め入った。ローマ軍はケルト人の侵攻を阻むことができず敗走、ローマ市内は破壊と略奪のかぎりを尽くされた。この後の顛末はポリュビオスとリウィウスで異なるが<sup>11)</sup>、ケルト人はユピテル神殿のあるカピトリウムを除くローマ市全域を7か月間に渡って制圧した。

ポンペイウス・トログスは、「神聖なる春<sup>12)</sup>」としてももとの居住域からイタリア半島へやってきたケルト人の、もうひとつの動向を伝える。イタリア半島へ渡りながらもそこへ定住しなかった一団は、一路パannoniaへと向かった。彼らはそこでさらに二手に分かれ、一方はギリシアを、他方はマケドニアを目的地とした。ベルギウスを指導者とした集団は、戦火を交えたのちマケド

ニア王プトレマイオスの首を斬りおとした（紀元前 281 年）。いっぽう、将軍ブレンヌに率いられたケルト人の軍隊は、紀元前 279 年にギリシアのデルフォイへの侵攻を試みるが、敗北を喫した。さらに紀元前 225 年には、タラモネ湾に面する町テラモンにおいて、ケルト軍ガイウス・アティリウス率いる軍勢とルキウス・アエミリウス率いる軍勢に挟撃を受けて惨敗した<sup>13)</sup>。そして、紀元前 58 年から紀元前 52 年にかけてカエサルのカリア遠征が進められ、アレスシアの攻囲でケルト人は完全にローマに屈することになるのである。

歴史学における「ケルト」とは、主としてアルプス以北のライン川より西の地域に住み、紀元前 5 世紀末以降イタリア北部やギリシア、小アジアに侵攻し、やがてローマに征服された人々とその居住域であるといえる。しかし、それらの言葉はあくまでも地中海世界の人々による「他称」であり、そもそもは「野蛮人」を意味する。著述家たちがそのように呼ぶ指標となったものは不明瞭である。

## 1-2) 言語

言語学において「ケルト」が説明される際、それはケルト系の言語の話者と、その居住地域をしめしている。

インド・ヨーロッパ語の一派としてのケルト系言語は、地理的な観点から「大陸ケルト語」と「島嶼ケルト語」の 2 種に大別される。「大陸ケルト語」はすでに消滅してしまっている。ガリア語（フランス、ベルギー）、ケルト・イベリア語（スペイン、ポルトガル）、レポント語（イタリア北部）、ガラティア語（小アジア）、そして東方ケルト語がこちらに該当する。大陸ケルト語は現在消滅している。それゆえに、これらの言語の痕跡は碑文や地名への名残<sup>14)</sup>によってのみたどることができる。大陸については、それらの痕跡の存在する地域が、言語学的な「ケルト」となる。いっぽう「島嶼ケルト語」には、ブルトン語（ブルターニュ）、コーンウォール語（コーンウォール）、アイルランド語（アイルランド）、マン島語（マン島）、スコットランド・ゲール語（スコット

ランド、ヘブリディーズ諸島)、ウェールズ語(ウェールズ)などが含まれる。ウェールズ語などは、現在も学校教育に取り入れられるなどして受け継がれている<sup>15)</sup>。

ケルト系言語の分化については、インド・ヨーロッパ語の伝播とともに議論の対象となってきた。通説では、インド・ヨーロッパ語から派生した「原ケルト語」が中央ヨーロッパで生まれ、その居住者がヨーロッパの各地に移動して言語を伝え、その結果として先述の「ケルト語」の広がりができたと考えられてきた。つまり、ケルト語の分布はケルト人の大規模な移動のあった証拠とされてきたのだ。

これに対し言語学者のコリン・レンフルー(Colin Renfrew)は、インド・ヨーロッパ語のヨーロッパへの到来を、通説よりも早い紀元前4000年以前に設定し、ケルト語の分化と発展はその各地域で起こったと主張した<sup>16)</sup>。つまり、ケルト語は「原ケルト語の話者」の移動によって各地へ伝わったのではなく、「インド・ヨーロッパ語の話者」が各地へ渡っていて、そのうえでおのこの言葉に枝分かれをした、ということである。「元となる中心」と「影響を受けた辺境」という序列ではなく、おのこの同等な関係でのインタラクションによって「ケルト語」が発展したと考えるのは建設的であろう。

言語学における「ケルト」とは、「ケルト系の言語の話し手であり、主にイベリアからドナウ川流域、ブリテン、アイルランド両島と周辺諸島、イタリア北部、小アジアにいた人々」となる。しかし、レンフルーの言うように、人々の移動にともなってそれらが広がったのではないのであれば、彼らが同一の人種であるとは考えにくい。

### 1-3) 考古

考古学においては、ヨーロッパ地域の鉄器文化がケルト人によるものとされる。

中央ヨーロッパ地域における鉄器の使用は、メソポタミアやバルカン半島、そしてイタリアからの伝播を受けてはじまった。とくにイタリア北部、及び中

部のエトルリア人先住民のヴィラノーヴァ文化圏を介してその影響を受けたようである<sup>17)</sup>。その中心であったのが、現オーストリアのハルシュタット [Hallstatt] であり、この地で栄えた文化を「ハルシュタット文化」と、その隆盛期である紀元前 12 世紀から紀元前 5 世紀を「ハルシュタット期」と呼ぶ。ハルシュタット期は、青銅器時代に属する A 期・B 期 (A 期：紀元前 1200 年頃～紀元前 1000 年、B 期：紀元前 1000 年～紀元前 800/750 年) と、鉄器時代に属する C 期・D 期 (C 期：紀元前 800/750 年～紀元前 650/550 年、D 期：紀元前 650/550 年～紀元前 350 年) の 4 段階に分かれる。

ハルシュタット B 期後半から C 期にかけて、ケルト社会は交易によって富を独占した一部の権力者によって支配されるようになり、岩塩採掘とその輸送によって栄えた共同体を有した。権力者は、「丘上要塞 (Fürstensitze)」と呼ばれる砦に囲われた居住地に住まった。権力者たちは首領となり、地中海地域に塩や鉱物を輸出し、逆に相手からは武器、装飾品、ワインなどを輸入する交易の仲介役として振る舞った。紀元前 8 世紀頃、この交易はハルシュタット文化圏の東部を中心におこなわれ、この時期にはすでにハルシュタット文化圏の東部と西部で、装飾文様のパターンに違いが見られる<sup>18)</sup>。この時代は、ギリシア植民市からの輸入品そのものやそれを模倣した作品が納められる巨大な墳墓によって特徴づけられる (図 2、図 3)。とりわけ紀元前 8 世紀以降の、ハルシュタット以西のフランス東部、スイス、ドイツ南部、オーストリア西部地域が「ケルト」とむすびつけられる。

つづく紀元前 5 世紀後半から紀元前 1 世紀前半の「ラ・テーヌ文化」は、スイス・ヌーシャテル湖畔のラ・テーヌ遺跡 [La Tène] にその名を由来し、お

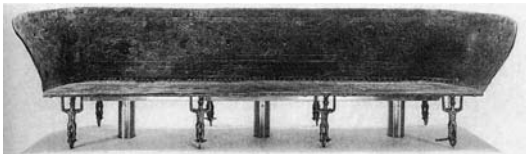


図 2 エバーディンゲン・ホーホドルフ出土の青銅のベンチ  
[出典：ロイド&ジェニファー・ラング、『ケルトの芸術と文明』, 29 頁。]



もにライン河中流域を中心として発達した文化である。中央ヨーロッパではA期（紀元前450年～紀元前400年頃）、B期（紀元前400年頃～紀元前250年頃）、C期（紀元前250年頃～紀元前140年頃）、D期（紀元前140年頃～紀元後）の4フェーズに分かれる。B期、C期、D期はさらに、B期をB1（紀元前400年頃～紀元前350年頃）とB2（紀元前350年頃～紀元前250年頃）、C期をC1（紀元前250年頃～前200年頃）とC2（紀元前200年頃～紀元前140年頃）、D期をD1（紀元前140年頃～紀元前100年頃）、D2（紀元前100年頃～紀元前10年頃）、D3（紀元前10年頃～紀元後）に区分される。



図3 ヴィクス出土のクラテル  
[出典：Miranda Green, *Celtic Art*, p.14.]

ラ・テーヌ期は、対外との活発な接触の結果、土着の職人の手による独自の様式が生み出され、紀元前2世紀以降にいちじるしい発展を遂げた時代である。それは、イタリア半島や小アジアへ向けた大規模な移動、他文化との接触と衝突、そして敗北という事象に彩られていた。歴史における「ケルト」の一連の出来事も、この時代に起こった。また、この時代に生まれた独特の幾何学模様や渦巻を配した美術は「ケルト美術」の代表的なものである（図4、図5）。「ラ・テーヌ＝ケルト」、という図式が、ここに生まれるのだ。

考古学における「ケルト」は、「ハルシュタット、ラ・テーヌ両方の文化の遺物の多く残る中央ヨーロッパを中心に繁栄し、地中海世界とは異なる独自の文化を発展させた人々」を指す。

このように、「ケルト」の定義は学問分野ごとでバラつきがあるため、どの分野に重きを置くかによってその範囲が変わってしまうという致命的な欠点がある。この欠点ゆえに巻き起こったのが先に述べた「島のケルト」否定論であるが、この状況はなぜ生まれてしまったのだろうか。次章では、近世以降



図4 ラインハイム [Reinheim, Ldkr. Darmstadt-Dieburg, Hessen] 出土の黄金のトルク  
 [出典：ラング，前掲書，56頁。]



図5 パルスベルク [Parsberg, Ldkr. Neumarkt in der Oberpfalz, Bayern] 出土の青銅のファイブラ  
 [出典：Venceslas Kruta et. al. (eds.), *The Celts*, p.325.]

の「ケルト」研究史をひもときながら、この欠点の起源について考えていきたい。

## 2章 19世紀までのケルト研究

### 2-1) 16～17世紀：「ケルト（ガリア）」の再評価の兆し

原聖氏の論考がしめしているように<sup>19)</sup>、古代史に強烈な印象を残した「ケルト（ガリア）人」は、14世紀初頭までは「周縁の野蛮人」として認識されるにすぎず、ほとんど忘れ去られた存在であった。「ガリア」と「ケルト」の区別もつけられないままであった。

15世紀から16世紀にかけて、その状況に変化がおとずれる。イギリスやフランスをはじめとした国家の枠組みの確立や、プロテスタントの誕生を経て、ヨーロッパ各国に「独自性」意識の芽生えが起ころいはじめた<sup>20)</sup>。人々は「起源神話」を求めるようになった。フランスにとって、起源となる民族はガリア

人、すなわちケルト人であった。

1552年、フランスの言語学者ギヨーム・ポステル（Guillaume Postel）は、著書『ガリアの弁明』において、ガリア人すなわちフランス人の祖先として、旧約聖書のノアの子孫・ゴメルを掲げた。ガリア人の先祖としてノアの子孫を挙げるのはポステルが初めてではなく、1498年、イタリアの神学者で偽書制作者でもあるヴィテルボのアンニウス（Annio da Viterbo）が、ガリアの王の先祖としてのブリタニア王の系図に連なる者として、同じくノアの息子ヤフェトを挙げている。それまで「ヨーロッパの起源」として信じられていたのは、ジェフリー・オブ・モンマス（Geoffrey of Monmouth）が『ブリタニア列王伝』で記したように、「トロイアのアイネイアス」であった<sup>21)</sup>。アンニウスの記述は、これをはるかに遡るものであり、ポステルの時代である16世紀においても継承されていた考え方であった。原氏は、国の起源と聖書を結びつけたポステルの主張は、ヨーロッパ、すなわち当時の世界全体における「フランス」という国家の政治的優位性を主張することをもくろんだものであったと述べる<sup>22)</sup>。

## 2-2) 「ケルトマニア」の登場

「ケルトマニア」は、「言語の類似性を重要視し、ケルトの正統な継承地をブルターニュとウェールズとする」人たちであり、ひいては「ヨーロッパの始原の民としての“ケルト人”を過剰に礼賛する」人たちのことである。18世紀は、こういったケルトマニアが数多く現れる時代であったと原氏は言う<sup>23)</sup>。17世紀は、言語学的な「ケルト」と「ケルトマニア」出現の萌芽といえる。「言語」の観点から民族やその優位性について考える論考が多く著された。哲学者・数学者として名高いゴットフリート・ライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz）もこのうちのひとりである。「言語」と「民族」とがイコールで結ばれていた時代といえる。「ケルトマニア」の登場は、言語学における「ケルト」が定められるにあたって大きな役割を負ったといえよう。18世紀、それは2人の人物によっておこなわれた。大陸と島嶼の「ケルト」を結びつけたフラン

スのポール・イヴ・ペズロン (Paul-Yves Pezron) やウェールズのエドワード・ルイド (Edward Lhuyd) は、現代に続く「ケルト」の考え方の嚆矢である。

ペズロンは 1639 年、ブルターニュのエンヌボン生まれの神学者である。彼は 1703 年、*Antiquité de la Nation et de la langue des Celtes* を出版し、ケルト語を、「人類最初の言語 (始原語)」であると唱え、さらには、彼の同時代にも話されていたブルトン語が最古のケルト語であると述べた<sup>24)</sup>。彼は、「偉大な」ガリアを継承するものとしてブルターニュとウェールズ語を設定し、「ヨーロッパ最初の民族ケルト人の祖」であるノアの子孫ゴメルの話語が、ブレイス (ブルトン) 語とカムリー (ウェールズ) 語の直接の祖先であると主張した。

ルイドはペズロンの同時代人であり、1660 年生まれのウェールズ出身の学者である。彼は 1696 年から 1701 年にかけて、ウェールズ、スコットランド、アイルランド、コーンウォール、そしてブルターニュを旅し、各地に残る石碑を模写して集めた。彼が、同時代のアングロ・サクソン史家などとの交流のなかで、中世のケルト考古学に寄与した貢献を評価する声もある<sup>25)</sup>。しかし、彼の最大の功績は、1707 年の *Archaeologica Britannia* である。ルイドはこの著書において、アイルランド語も含めた「島嶼ケルト語」のすべてが古代ガリア語の仲間であると述べ、これらの言語の話者を「ケルト人」と呼びあらわした。彼はケルト系言語全体を把握し、ケルト系言語話者を「ケルト人」と呼んだ初の人物である。

すでに 16 世紀末には、ジョージ・ブキャナン (George Buchanan 1506～1582) が古代のガリア語と古代スコットランド・ゲール語およびアイルランド語との同一性を述べていたけれども、ペズロンやルイドはそれよりさらに飛躍して、古代ブリテン島の人々と古代ガリアの人々を「同じ言語の話者=同族」とみなした。そのうえ、「ヨーロッパ最初の民族と、彼らの生き残る地」として、16 世紀にそれぞれフランスとイギリスに併合されていた「辺境」のブルターニュとウェールズ、という主張を生み出したのである。

ペズロンとルイドが、単なる古代への学問的な情熱のために「ケルト (ガリ

ア)の偉大さ」を唱える人々と一線を画す理由がもうひとつある。それは、ふたりとも「ケルト語圏出身者」であるという点だ。彼らがケルト（ガリア）の偉大さ」を唱え、ケルトは「ヨーロッパの起源」であり、その正統な末裔が、ケルト系言語の話者であるブルターニュ人、ウェールズ人であると定めることは、現実では大国に組み入れられた「辺境」である自分たちの故郷を称揚するという、愛郷的側面があったとみることもできよう。

18世紀後半は、ケルト語圏出身者による「ケルト＝ヨーロッパの起源」論が過熱した。彼らは言語の、音韻の類似性を重要視し、ケルトの正統な継承地をブルターニュとウェールズだと考え、固執した。他の言語との比較によって、ケルト語、とくにブレイス語、カムリー語、コーンウォール語であるケルノウ語が「人類最初の言語」「始原語」であるという自分たちの主張を裏づけようとしたのである。ジャック・ル・ブリガン (Jacques Le Brigen) やテオフィル・マロ・ド・ラ・トゥール・ドーヴェルニュ (Théophile Malo de La Tour d'Auvergne) などのブルターニュ出身の研究者たちが、「ブレイス語」が最初の言語としての優位性を有していると主張した。18世紀における「ケルト」とは、ブルターニュとウェールズであり、それはつまり、始原語としてのケルト語の生き残る場所とその話し手を意味していた。

ところで、18世紀後半にはもうひとつの大きな出来事があった。スコットランドの詩人ジェームズ・マクファーソン (James MacPherson) による『オシアン *Ossian*』の発表である。

『オシアン』は、3世紀の英雄フィンガルの息子オシアンが、自分の息子の許嫁であるマルヴィーナに語った、父の若きころの武勲の物語である。マクファーソンはこれらの物語を、スコットランドのゲール語話者への取材などによって集めた。この、当時の現代に語り継がれた古代の歌物語の発見は、近代化が著しく進むなかで、「文明への逆行の象徴」として、ロマン派の人々に称賛をもって受け入れられた<sup>26)</sup>。そして、ヨーロッパ各地で古歌採集が流行するわけであるが、それは、自分たちの祖先やアイデンティティの探求につながる、一種のナショナリズム的行動でもあったのである。

### 2-3) 考古学の確立と「島のケルト」の「発見」

1804年、前世紀のケルトマニアたちの「熱心な」活動のおかげもあり、フランスにてケルト・アカデミーが創設された。アカデミーでの研究対象にはアルバ語（スコットランド・ゲール語）も加えられ、19世紀初頭には、ブリテン島北部が「ケルト」として認識されつつあった。しかし、このアカデミーは、その創設を支援した皇帝ナポレオンの没落とともに衰退し、1814年、「フランス王立考古協会」に改組を余儀なくされる。ここには、ナポレオンの偉業を、ローマとは異なる「フランスの古代＝ガリア」と結びつけようとした明確な意図を理解することができる<sup>27)</sup>。

しかし、古き良き祖先の伝統を求めるパトリオティックな動きはとどまることを知らなかった。そのうちでもっとも大きなものが、『バルザス・ブレイス *Barzaz Breiz*』である。ブルターニュの農村に伝わっていた5世紀から6世紀の古謡を集めたこの書は、ブルターニュ出身の貴族階級の青年、テオドール・エルサール・ラ・ヴィルマルケ（Théodore Hersart de La Villemarqué）によって編まれた。『イスの町の水没』<sup>28)</sup>などをはじめとした、キリスト教と「ケルト」の死生観が混ざり合った幻想的な民謡は、『オシエン』と同様に、近代化する世界のなかに残されていた、古く素朴な農村の原始的な文化を象徴するものであった。序文においてヴィルマルケは、「(同時代の) 批判的研究は、・・・古代のバルドたちの冠であった花をつけた白樺の小枝を優雅に受け取るのだ。この白樺の小枝は、長いあいだ逃れ追ひ払われていたブルターニュの詩神<sup>ミューズ</sup>ようやくその順番が回ってきて、批判的研究に捧げにやってきたものである」と書いている<sup>29)</sup>。ここにも、抑圧された故郷の正しい評価を望む思いが、少なからず込められているように思われる。「フランス」という国の基層文化として規定されていた文化と一線を画するケルト系文化の存在を主張するのが『バルザス・ブレイス』である、と、山内淳氏は述べる<sup>30)</sup>。

このような民謡採集の活発化は、民俗学の発展に大きく貢献した。そのいっぽうで、実証的研究もスタートするのが19世紀後半である。1840年代以降、考古学が学問として確立すると、ヨーロッパの各地で古代遺跡の発掘調査が盛

んにおこなわれるようになる。この考古学の体系化は、人々の古代への関心をさらに掻き立てるものとなった。1846年から1868年にかけてのハルシュタット、そして1857年のラ・テーヌ両発掘も、この機運のなかでおこなわれたものだ。フランスにおいても、ときの皇帝ナポレオン3世の熱心な主導により、ガリアとローマの戦いの舞台であるアレシア [Alesia]、ゲルゴウイア [Gergovia]、そしてビブラクテ [Bibracte] に比定される地の発掘がおこなわれた<sup>31)</sup>。とくに、ガリア人とカエサル最後の戦いの場であるアレシアには、ガリア人の英雄ウェルキンゲトリクスの像が建てられた。その顔はナポレオン3世に似せて作られていた<sup>32)</sup>。

この時代、そして後々までの「ケルト」にまつわる研究に大きな影響を与えたのが、フランスの考古学者ヨセフ・デシュレット (Joseph Déchelette) だった。彼は、当時発展しつつあった層位学の方法を、考古学に応用した。彼は、土葬を「ケルト人」、火葬を「ゲルマン人」の文化とし、フランス北部での土葬から火葬への移行を「ゲルマン人の侵食」としてとらえた。このような出土物によって民族を分ける考え方は、20世紀初頭の「文化グループ」の考え方に先立つ主張であった<sup>33)</sup>。そして、彼によって「ラ・テーヌ美術＝ケルト美術」の図式が確立され、20世紀においてもそれは支持された。

またドイツでは、19世紀後半にローマ遺物の研究機関がいくつか創設された。それらは、とくに「ケルト」を中心としていたわけではなかったが、ドイツ国民の「祖先」である民族（主にゲルマン人）の文化をローマ文化の遺物のなかから探し出し、賞賛するために古代史を研究する機関であった。これは、1871年のドイツ統一と関連する、民族主義、あるいは愛国主義的側面を有していた<sup>34)</sup>。

ブリテン島でも、考古学的な大発見があった。ジョン・エヴァンズ (John Evans) とアーサー・エヴァンズ (Arthur Evans) の父子2代にわたるブリテン島の発掘調査 (1864年、1886年) によって、カエサル到来以前のブリテン南東部における鉄器文化に、大陸との共通点を見出された。このことが「ベルガエ人の移住」のあった証左とされたことにより、「ケルト」による大陸と島の

結びつきがしめされた<sup>35)</sup>。ここに「島のケルト」が「発見」されたのである。

これらのことを経て、純粋な古代への憧憬と歴史的興味と、そして政治的思惑に彩られながら、「ケルト」研究は体系化されつつあった。このように見ると、19世紀までの「ケルト」とは、おおむね「今や辺境の生き残りである始原の民」や、「古の文化を今に伝える慈しむべき存在」、あるいは「祖国のアイデンティティをしめすもの」という認識であったと考えてよいだろう。そこには、研究する主体の個人的な民族意識が、多かれ少なかれ反映されているといえる。とくに18世紀の「ケルトマニア」たちの研究は、現在の価値観では学問的とはいええないのかもしれない。しかし彼らの考え方は、当時はもちろん、ひいては後代の「ケルト」観に多大な影響を及ぼしている。

### 3章 20世紀における「ケルト」の展開

#### 3-1) 20世紀前半の「ケルト」—民族主義の気風のなかで—

20世紀初頭、グスタフ・コッシーナ (Gustaf Kossina) やゴードン・チャイルド (Gordon Childe) によって、「文化グループ (Cultural Group)」理論が提唱された。これは、ひとつの物質文化を「ひとつの民族のもの」として捉え、物質文化の広がりによって民族の移動や侵略を説明するものであった。19世紀におけるデシュレットの、土葬を「ケルト人」、火葬を「ゲルマン人」の文化だと固く結びつける方法と同様のことである。これは「ケルト」においても当てはめられた。「ラ・テーヌ文化」が「ケルト」と固く結ばれ、その文化の広範な広がりこそ、「ケルト人の大移動」を証明するものであると信じられた。とくにブリテン島におけるラ・テーヌ様式の鉄器文化の遺物の存在は、この地に大陸の「ケルト」、すなわちバルガエ人が移住したことをしめすものであると解釈された。以降、「島のケルト」否定論が噴出するまで、「ケルト人のブリテン島移住」説は、少しの批判を受けることもなかった。おもに貨幣研究の視点から、「島のケルト」は研究されていった。貨幣研究者デレック・アレン (Derek F. Allen) などによって、バルガエ人の王の名が刻まれた貨幣がブ



リテン島でも出土しているという事実から、移住説は補強され、支持された<sup>36)</sup>。またアイルランドでは、1920年代にキリスト教文学や法などの文書を用いた中世史研究が本格化し、修道院文学にも目が向けられるようになった。これらには先の時代の「ケルト」の影響が強く残っていると信じられていた。1922年の独立前後の気風のなかで、「民族の誇り」として「ケルト」は研究の対象となった。法制史家のダニエル・ビンチー (Daniel A. Binchey) が編纂した *Corpus Iulii Hibernici* は、古・中世アイルランド世俗法の集成であり、初期アイルランドの歴史の一端をあきらかにすることに貢献したほか、それらの法律のなかにはキリスト教以前の慣習－ビンチーはそれを「ケルト」ととらえた－が変わらず残されていると述べたのである。

戦争は、古代史研究にも大きな影を落とした。とくにドイツでのそれは著しいもので、ナチの台頭により、はからずも人種主義的な側面をはらむこととなった。ナチの思想に同調した研究者も少なからずいたが、背いた者もいた。第1部3章においても述べたゲルハルト・ベルスのほか、パウル・ヤーコプスタール (Paul Jacobstal) もドイツを去り、1944年、ケルト美術史学における大著 *Early Celtic Art* をイギリスにて上梓した<sup>37)</sup>。

### 3-2) 20世紀後半の「ケルト」－「ケルト」概念のゆらぎのはじまり－

戦争が終わり、ポスト帝国主義の流れのなかで、戦前の「ケルト」研究への批判的視点が、徐々にあらわれるようになった。まず1960年代、イギリス考古学界において、それまで定説であった「ベルガエ人のブリテン島移住説」への批判が起こりはじめた。しかし、当時の批判する学者たちは、もし人の移住がなかったのであれば、なぜ大陸とおなじ物質文化－すなわち、ラ・テーヌ文化の遺物－がブリテン島南東部に存在しているのか、という疑問への回答を出すことができなかった。この点については、文化だけが交易などの理由で伝播したとも推定されるが、今も断言はできない。

アイルランドでも、1970年代以降、従来の中世キリスト教文学研究の見直しがはじまり、中世アイルランド文学を「ケルトの遺産」とすることへの批判

がおこった。ピンチーなどの主張は今や否定されている。田中美穂氏は、研究におけるこの方向転換を、「独立達成から半世紀を経て、苦い歴史体験にもとづく国民感情が克服され、冷静に客観的に自国の過去の歴史や文化が研究されるようになったといえる」と述べる<sup>38)</sup>。

もはや過去とは違い、「ケルト」が島嶼の古代の根幹を成すものであるという説には、つねに疑問や不信がつきまとうようになりつつあった。そのようななかで叫ばれたのが「“島のケルト” 否定論」だ。それまでの安易な「ケルト」との結びつけが否定されるようになり、大陸からの「移住」がなかったということがきっぱりと断言された。近年のイギリスの考古学者たちは、ヘルメット(図6)などの遺物が、無批判に「ケルト」の遺物とされてきたことを反省する。とりわけ、ジョン・コリスやサイモン・ジェームス(Simon James)などの代表的な「ケルト否定論者」は、「ケルト」などという統一的な文化集団は存在しない、それどころか、「ケルト」は近代の捏造であるとまで言い切っているのである。しかし、彼らの批判の裏には、EU 発足前夜のヨーロッパにおいて、「ヨーロッパ統合の象徴」として、政治プロパガンダ的に「ケルト」が使われるようになったことへの反発があったのではないかと、南川高志氏は述べる<sup>39)</sup>。折しも1991年、ベネチアで「ケルト人」をテーマとした大規模な展覧会が開催された。そこでは、キリスト教とならぶもうひとつの「ヨーロッパの礎」として「ケルト人」を紹介する主旨があり、それはベルリンの壁崩壊後のヨーロッパにおける「団結」の気風を反映するものであった。このような気風への反発が「ケルト否定論」だったのである。

コリスやジェームスの唱える「ケルト否定論」は、イギリス国内でも全体に受け入れられたわけではなく、ある意味で彼らは「過激派」であった。彼らに真っ向から対立したのが、オーストラリアのケルト美術史家のヴィンセントとルース・ミゴー夫妻(Vincent J. S. Megaw, Ruth Megaw)である。彼らは「ケルト」を「汎ヨーロッパ的・統一的な文化集団」として見る研究者で、雑誌*Antiquity*においてコリスと「ケルト」をめぐる議論を交わしたことで知られる<sup>40)</sup>。しかしミゴー夫妻の功罪は彼らの思想自体ではなく、「ケルト」の問題

を歴史学以外の場所へ引きずり出してしまったことである。すなわち、論争のなかで、夫妻は「イギリスにおけるケルトの否定は、マイノリティの否定にほかならない<sup>41)</sup>」と述べたのだ。マイノリティという、きわめてデリケートな範囲に及んでしまった「ケルト」概念をめぐる議論は、この論争以降ほとんどされなくなってしまった。



図6 テムズ川出土の兜  
[出典：Miranda J. Green, *The Celtic Art*, p.102.]

### 3-3) 「ケルトブーム」と日本の「ケルト」

ところで、学問上での批判的な視点の芽生えとは対照的に、一般民衆の世界では「ケルト」がますます礼賛されることになる。ポップカルチャーとしての「ケルト」の流行である。まずフランスでは、ルネ・ゴシニ (René Goscinny) とアルベール・ユデルゾ (Albert Uderzo) による漫画『アステリックス *Astérix*』がその代表といえる。ウェルキンゲトリクスをあきらかにモデルとしている主人公・アステリックスとその仲間たちが、ローマ軍の鼻を明かして活躍するこの漫画には、18世紀以来の「偉大なガリア」のイメージがふんだんに込められている。1970年代のフランスでは、「ケルト」が「文明に対抗するもの」として若者に受け入れられた<sup>42)</sup>。

1980年代の第2次ケルトブームでは、エンヤを筆頭としたアイリッシュミュージックなどを礼賛する動きがあった。それは「ファンタジーなもの」としてのケルトへの憧憬であり、トゥアハ・デ・ダナーンの世界群、『ケルズの書』などの中世アイルランド文学・キリスト教美術研究からの影響が大きい。日本で「ケルト」が注目されはじめたのもこのころだ。『ケルト／装飾的思考』の著者である鶴岡真弓氏は、日本における「ケルト」研究のパイオニアであり大家である。彼女の著書は、アイルランドを中心に、それらの地域を「島のケルト」として躊躇うことなく扱う。ブリテン、アイルランドの遺物を「ケルトの

生き残り」として褒めそやし、アイルランドを「ケルト」と見なし、あげくの果てにはユーラシア大陸の「西の端」と「東の端」の島国の民に、文化的な類似性を見出そうとしている。氏の「ケルト」観はミゴ夫妻のそれに近く、日本における「ケルト」研究の支配的な見方といえる。鶴岡氏とは対照的に、アイルランド中世史研究者の田中美穂氏は、近年のヨーロッパでの議論を取り入れて「島のケルト」へ批判的な視点を向けており、鶴岡氏への批判もおこなっている<sup>43)</sup>。また田中氏は、アイルランドにおける分子遺伝学の研究を題材に「島のケルト」論にも取り組んだ<sup>44)</sup>。それによれば、分子遺伝学的にはアイルランド人のルーツがスペインにあることがあきらかとなっているが、それが「ケルト」の移住をしめすものであるかとか、それらの人々がいつアイルランドへやってきたのかなどについては共通の見解が出ておらず、さらに「ケルト」概念についても、はっきりとしたことが言える状況にはないのがアイルランドの現状であるという<sup>45)</sup>。

ともかく、ヨーロッパの最新の研究動向を取り入れ、批判的な「ケルト」研究をおこなっているのは田中氏がほとんど唯一であろう。日本ではおおもむね、見直しの必要のある「ケルト概念」を無批判に使用している現状である。それゆえに、通俗的なものに過ぎないといえよう。

## おわりに

本稿では「ケルト」概念そのものについてと、現在の「ケルト」概念が形成されるまでを概観した。「ケルト」のあいまいさは、おのおのの時代、おのおのの国での政治的な風潮を色濃く受け、明白な矛盾や齟齬を抱えたまま、ひとまとめにされた結果であるといえるだろう。図7はコリスによるもので、現在「ケルト」として含まれる事柄を記したものである。

「ケルト」は、まず「人々」「言語」「芸術と文化」そして「宗教」に分かれ、最初の3項目はそのなかでさらに「古代」と「近代」に二分される。これらの、さまざまなファクターのほとんどが相互のつながりを学問的に証明されな

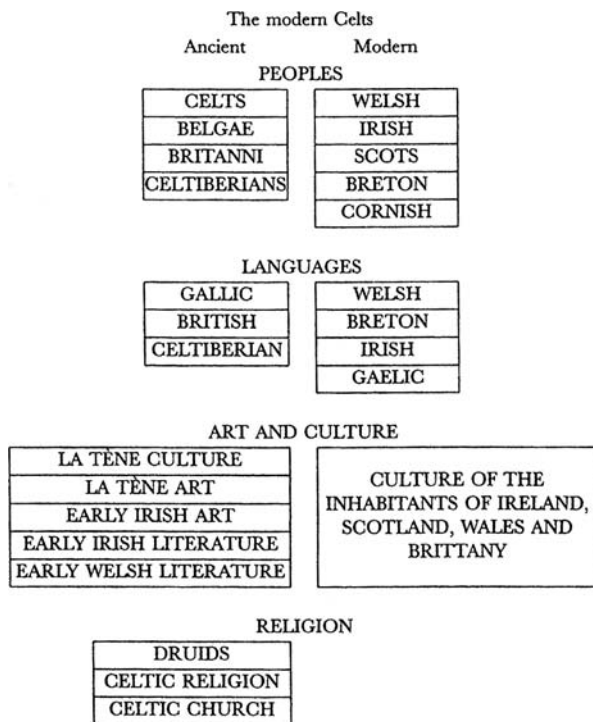


図7 「ケルト」概念が含むもの [出典：Collis, “Origin and Spread of the Celts”, Fig.10.]

いまま、「ケルト」にカテゴライズされているのである。

例として、ここでは「言語」について考えてみよう。

まず「古代ケルト語」は、文献に残る「ケルトイ」を含む多くの人々（部族）が話していた言語の総称－ガリア語、ブリテン語、ケルティベリア語－である。いっぽう、「近代ケルト語」は、17世紀の民族起源論の高揚のなかで、「ゴメル（とその子孫）＝ヨーロッパ最初の民族」の話語の正統な末裔とされた言語－ウェールズ語、ブルトン語－、および、それと音韻的に類似する言語－アイルランド語、ゲール語、コーンウォール語－を指す。この2種類には、直接的な関係性の明示はなく、もちろん無関係である可能性もある。しかし、現在の「ケルト」概念では、これらが一直線につながるものであるとみなし

て論考が進められるのである。古代の遺物を、近代の解釈に当てはめて考えるということが、「ケルト」というものをますます茫洋としたものになっているように感じられる。

最後に、筆者の考える「ケルト」の定義について述べておきたい。「ケルト」とは、ヨーロッパ地域における、ローマ支配以前に居住した「複数の」民族の総称に過ぎないのではないだろうか。もしかしたら、「ケルト」という言葉は不適切でさえあるかもしれないのであり、今後の研究の進展により、別の呼び名があたえられる可能性すらある。複数の集団の総称なのだから、個々の文化の差があるのは当然のことであろう。そして個々の文化の差が表出するのが、地域ごとでの遺物の差異なのだと考えている。

しかし、ラ・テーヌ文化の遺物のように、彼らが似通った文化を共有していたこともまた事実である。それは、物質文化だけでなく、「ケルト」の3大神－テウタテス、エスス、タラニス－をふくむ宗教観など、精神的な面においても同様である。そのことを考慮しつつ、おのおのの集団、あるいは部族の社会を個別にみることによって、比較的現実味のある、要は地に足のついた「ケルト」像の描出が可能なのではないだろうか。

今後の「ケルト」研究においては、「ケルト」と呼びあらわされるものの差異＝「ケルトの地域性」を見ることが重要となってくるはずである。地中海世界の外の多様な社会のなかで、彼らが自らを、あるいは近隣のよそ者をどのように認識していたのか、彼らのアイデンティティの形成に寄与したものは何かを考えることが、必要になってくるであろう。ローマ支配以前のアルプスの北に住んだ人たちの社会を、「個別の事例」として見ることにより、「ケルト」という包括的な概念のなかでは見ることのできない、「ケルト」と呼ばれた人たちの「幻想的でない」ありようを知ることができるはずだ。

## 註

- 1) 田中美穂, 「研究動向『島のケルト』再考」, 『史學雜誌』, 111 卷 10 号, 2002 年, 56～78, 57 頁。
- 2) 原聖, 「ケルト概念再考問題」, 京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム

- 「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」編、『人文知の新たな総合に向けて第二回報告書Ⅰ〔歴史篇〕』, 2004年, 291~306, 301頁。
- 3) Simon Hornblower, Antony Spawforth, Esther Eidinow (eds.), *Oxford Classical Dictionary* (4<sup>th</sup> ed.), Oxford University Press, 2012, p.295.
  - 4) ジャン・マルカル (金光任三郎, 渡邊浩司訳), 『ケルト文化事典』, 大修館書店, 1999年, 66頁。
  - 5) Venceslas Kruta, "Celtic Writing," in Venceslas Kruta et al. (eds.), *The Celts*, Rizzoli, New York, 1999, pp.516-532, p.516.
  - 6) 『ガリア戦記』1巻1; 石垣憲一訳, 13~14頁。
  - 7) ストラボン, 『地誌』, 第4巻1章; 飯尾都人訳, 『ギリシア・ローマ世界地誌』, 龍溪書舎, 1994年, 304頁。
  - 8) プリニウス, 『博物誌』, 第4巻17章105; 中野定雄他訳, 『プリニウスの博物誌』, 雄山閣, 1986年, 201頁。
  - 9) ポリュビオス『歴史』, 第2巻17; 城江良和訳, 『歴史1』, 京都大学出版会, 2004年, 154頁。
  - 10) リウィウス, 『ローマ建国以来の歴史』, 第5巻34章; 毛利晶訳, 『ローマ建国以来の歴史2』 京都大学出版会, 2006年, 347~348頁。
  - 11) ポリュビオスによれば、自分たちの制圧した領土がウェネティ人の侵攻を受けたために引き上げた(『歴史』, 第2巻18)と、リウィウスによればローマ側がガリア人に黄金を支払うことで和解しようとしたが、支払いが完了する直前に独裁官カミルスがその場に到着し、ガリア人をローマから追い払ったとされている(『ローマ建国以来の歴史』, 第5巻49章)。城江良和訳, 156頁; 毛利晶訳, 381頁。
  - 12) 危機を迎えた際に祈願のために捧げられる春の初物のこと。ポンペイウス・トロガス, 『地中海世界史』, 24巻4章; 合阪學訳, 『ユニアヌス・ユステイヌス抄録 地中海世界史』, 京都大学学術出版会, 1998年, 311頁。
  - 13) ポリュビオス, 『歴史』, 第2巻27~31, 城江良和訳, 『歴史1』, 168~172頁。
  - 14) ケルト語由来の地名は語尾が「ブリガ」、「ドゥヌム」で終わるものが多く、その語尾を持つ場所はケルト人の居住地であったとみなされる。ジョン・ヘイウッド (井村君江監訳), 『ケルト歴史地図』, 東京書籍, 2003年, 54~59頁。
  - 15) 北村一親, 「ケルト語の特異性」, 『岩手大学人文社会科学部』, 50, 1992年, 1-16, 1~2頁。
  - 16) コリン・レンフルー (橋本楨矩訳), 『ことばの考古学』, 青土社, 1993年, 321~322頁。
  - 17) 三浦弘万, 「ヨーロッパ基層文化の生成と発達—ケルトの人びととその文化に焦点を合わせて—」, 『創価大学人文論集』, 18号, 2006年, 1~72, 38~39頁。
  - 18) 原聖, 『興亡の世界史07 ケルトの水脈』, 講談社, 2003年, 108~109頁。

- 19) 原聖, 「ケルトマニアの系譜－ケルト起源神話に憑かれた人々」, 鎌田東二, 鶴岡真弓編, 『ケルトと日本』, 角川書店, 2000年, 125～151, 125～126頁。
- 20) 同上, 128～129頁。
- 21) ジェフリー・オブ・モンマス (瀬谷幸男訳), 『ブリタニア列王史: アーサー王ロマンス原拠の書』, 南雲堂フェニックス, 2007年, 11～36頁。
- 22) 原聖, 「ケルトマニアの系譜」, 136頁。
- 23) 同上, 146～147頁。
- 24) Paul Yves Pezron, *The Antiquities of Nations ; more particularly of the Celtae or Gauls, taken to be originally the same people as our ancient Britains*, 1703, URL : <http://www.truth1.info/pezron.htm#CONTENTS>
- 25) Nancy Edwards, “Edward Lhuyd and the origins of early medieval Celtic archaeology,” in *The Antiquaries Journal*, 87, 2007, pp.165-196.
- 26) 山内淳, 「フランス ケルト学事始 (1)」, 『日本大学芸術学部紀要』, 48, 2008, 105～114, 111頁。
- 27) 山内淳, 「ケルト学誕生の軌跡 フランスを例として」, 『藝文攷』, 13, 2008年, 135～140, 138頁。
- 28) キリスト教初期の時代、神への信仰を忘れ享樂の限りを尽くすイスの町が、一夜にして海の底に沈む物語。
- 29) 山内敦監訳, 大場静枝他訳, 『バルザス・ブレイス ブルターニュ古謡集』, 彩流社, 2018年, 16～17頁。
- 30) 山内淳, 「フランス ケルト学事始 (2)」, 『日本大学芸術学部紀要』, 49, 2009, 119-128, 124頁。
- 31) アレシアは現在のアリーズ・サント・レーヌ、ゲルゴウィアはクレルモン＝フェランの南方、ピブラクテはブーヴレ山であると、それぞれ考えられている。
- 32) Michael Dietler, “A Tale of Three Sites : The monumentalization of Celtic oppida and the politics of collective memory and identity,” in *World Archaeology*, 1998, 30 : 1, pp.72-89, p.75.
- 33) John Collis, “Déchelette’s contribution to Iron Age Studies : theory and practice,” in *Anabases*, 9 (2009), pp.239-247, p.243.
- 34) Ingo Wiwjorra, “German archaeology and its relation to nationalism and racism,” in Margarita Díaz-Andreu, and Timothy Champion, *Nationalism and archaeology in Europe*, Westview Press, Boulder, Colorado, 1996, pp.164-188, p.168.
- 35) 南川高志, 『海のかなたのローマ帝国』, 岩波書店, 2003年, 76頁。
- 36) Derek F. Allen, “Celtic coins from the Romano-British temple at Harlow,” in *The British Numismatic Journal*, 37, 1968, pp.1-6.
- 37) Paul Jacobsthal, *Early Celtic Art*, Clarendon Press, Oxford, 1944 ; Sally Crawford and



Katharina Ulmschneider, "Paul Jacobsthal's Early Celtic Art, his anonymous co-author, and National Socialism : new evidence from the archives," in *Antiquity*, Volume 85, Issue 327, 2011, pp.129-141.

- 38) 田中美穂, 「研究動向『島のケルト』再考」, 62～63 頁。
- 39) 南川高志, 『海のかなたのローマ帝国』, 81 頁。
- 40) Ruth and Vincent Megaw, "The Celts : the first Europeans?," in *Antiquity*, 66, 250, 1992, pp.254-260 ; Ruth and Vincent Megaw, "Ancient Celts and modern ethnicity," in *Antiquity*, 70, 267, 1996, pp.175-181 ; John Collis, "Celtic myths," in *Antiquity*, 71, 271, 1997, pp.195-201.
- 41) Ruth and Vincent Megaw, "The Celts : the first Europeans?," p.259.
- 42) 原聖, 「ケルト概念再考問題」, 299 頁。
- 43) 田中美穂, 「研究動向『島のケルト』再考」, 60 頁。
- 44) 田中美穂, 「アイルランド人の起源をめぐる諸研究と「ケルト」問題」, 『大分工業高等専門学校紀要』, 第 51 号, 2014 年, 1～6 頁。
- 45) 同上, 5 頁。